

古期ロシア語の不定形構文があらわす モダリティ研究

渡 邊 聞

はじめに

本稿ではロシア語を含む東スラヴ語において特に発達した用法である不定形構文(инфинитивные предложения)と、その亜種と考えられている *быть* の諸形態を伴う不定形構文(инфинитивные конструкции с формами глагола *быть*) に関して表示するモダリティ(модальность)を特定する方法を模索し、同時に両者の関連性についてモダリティを通じて明らかにしようとするものである。現時点までの不定形構文、及びそのモダリティに関する研究としては、伝統的なロシア語文法によるもの(А.М. Пешковский⁽¹⁾、В.В. Виноградов⁽²⁾、Н.Ю. Шведова⁽³⁾等)、ロシア語歴史文法の視点によるもの(Ф.И. Буслаев⁽⁴⁾、А.А. Потебня⁽⁵⁾、К.А. Тимофеев⁽⁶⁾、О.А. Черепанова⁽⁷⁾、З.К. Тарланов⁽⁸⁾等)、より意味論に傾倒した言語のコミュニケーション機能を重視するもの(Г.А. Золотова⁽⁹⁾、С.С. Ваулина⁽¹⁰⁾、Т.В. Шмелева⁽¹¹⁾、А.И. Фомин⁽¹²⁾等)が見られる。特に不定形構文に

-
- 1 Пешковский А.М. Русский синтаксис в научном освещении. Изд. 8-е. М., 2001.
 - 2 Виноградов В.В. О категории модальности и модальных словах в русском языке // Виноградов В.В. Избранные труды. Исследования по русской грамматике. М., 1975. С. 53–87, и др.
 - 3 Русская грамматика. Т. II. Синтаксис / Под глав. ред. Н.Ю. Шведовой. М., 1980.
 - 4 Буслаев Ф.И. Историческая грамматика русского языка. Синтаксис. Изд. 7-е. М., 2006.
 - 5 Потебня А.А. Из записок по русской грамматике. Т. I–II. М., 1958.
 - 6 Тимофеев К.А. Об основных типах инфинитивных предложений в современном русском литературном языке // Вопросы синтаксиса современного русского языка. М., 1950. С. 257–301, и др.
 - 7 Черепанова О.А. Лексико-грамматические средства выражения модальности в русском языке XI–XVII веков: Автореф. дис. ... канд. филол. наук. Л., 1965.
 - 8 Тарланов З.К. Об основных проблемах изучения инфинитивных предложений в русском языке // Ученые записки Карельского педагогического института. Т. 16. Гуманитарные науки. Петрозаводск. 1964. С. 126–138, и др.
 - 9 Золотова Г.А. Очерк функционального синтаксиса русского языка. Изд. 2-е. М., 2005, и др.
 - 10 Ваулина С.С. Эволюция средств выражения модальности в русском языке (XI–XVII вв.). Л., 1988.
 - 11 Шмелева Т.В. Пропозиция и ее репрезентации в предложении // Вопросы русского языкознания. Вып. 3. Проблемы теории и истории русского языка / Под ред. К.В. Горшковой. М., 1980. С. 131–137, и др.
 - 12 Фомин А.И. Коммуникативные типы инфинитивных предложений в древнерусском языке XI–XIV веков: Автореф. дис. ... канд. филол. наук. СПб., 2003.

限らず、構文とモダリティの関係に関しては、近年論理的アプローチを含んだ意味的構文論 (семантический синтаксис) に基づいた研究が盛んであり、これらの理論を無視してモダリティ、更には不定形構文を研究することは不可能であるといつてよい。

筆者は以前、不定形構文のあらゆるモダリティは“コンテキストに依存せず”テキストの話し手と不定形構文のあらゆる動作主体との関連性によって決定される、と結論付けた¹³⁾。話し手と不定形構文のあらゆる動作主体との関連性については本稿においてもその正当性を主張することになるが、一方で、“コンテキストに依存せず”という点に関しては修正の必要があると考えている。まず第1に文 (предложение) というものが一部の例外を除いて単独で存在するものではなく、その集合体としてのテキストの構成要素を成す以上、コンテキストの影響を排除することは事実上不可能であると考えられるからである。第2に筆者の仮説に登場する話し手、不定形構文の動作主体といったものも既にコンテキストの一部であると考えられる点である。

従って本稿ではまず第1部において以前までの筆者の研究結果とコンテキストがどのような係わり合いを持つのかを検討する。その際、筆者の仮説において大きな意味を持つテキストの語り手、ないし会話の話し手と不定形構文の動作主体との関係が言語のコミュニケーション機能にあたることに着目し、上述の意味的構文論の立場からの研究を通して筆者の仮説の再検討を行う。続く論文の第2部においては *быть* の諸形態を伴う不定形構文と一般的な不定形構文との共通点を上記の仮説を基にして探ることとする。

第1部 不定形構文の意味的構文論に基づく分析

1-0. 第1部のねらい

第1部では1) 不定形構文におけるモダリティ生成が3つの階層を成すこと、2) またそのすべての階層において話し手と不定形の動作主体の関係が関与していること、3) 更に筆者の設定した上記の仮説が、以前筆者が主張していたような“コンテキストによらない”数学的法則ではなく、コンテキストとその中にあらわれる言語コミュニケーションの中で機能していることの3点を証明することを目指す。

13 詳細に関しては、渡邊聞「『過ぎし年月の物語』における無人称不定形構文の用法」『スラヴ研究』第53号、2006年、241-265頁；同「古期ロシア語文献にみる不定形構文があらゆるモダリティの選択基準：機能文法的視点からの考察」『ロシア語ロシア文学研究』第39号、2007年、10-17頁；*Ватанабэ Кику*: К вопросу о классификации модальных значений в инфинитивных предложениях древнерусского языка // Вестник Санкт-Петербургского государственного университета. Серия 9. Филология, востоковедение, журналистика. СПб., 2008. Вып. 2 (в печати); *Он же*. Критерии актуализации модальных значений в инфинитивных предложениях древнерусского языка // Материалы XXXVI международной филологической конференции. История русского языка и культурная память народа. СПб., 2007. С. 7-15; *Он же*. Влияние волюнтаривности на выбор модальных значений в инфинитивных предложениях «Повести временных лет» // Русская филология. 19. Сборник научных работ молодых филологов. Тарту, 2008 (в печати) 等を参照のこと。

1-1. 先行研究

1-1-1. モダリティの研究史

言語学の分野において初めて明確にモダリティの概念を取り上げたのはスイスの言語学者 Charles Bally である。Ch. Bally はその著書「Linguistique générale et linguistique française」⁽¹⁴⁾において文のあらゆる意味を Dictum（客観的内容）と Modus（動作主体による構文の内容に対する心的態度の表現）の2つに分類することを提案した。Ch. Bally はモダリティを文の本質と位置づけ、その存在なくして文の意味を考えることは不可能だと主張した⁽¹⁵⁾。

一方、現代ロシア語構文論における本格的なモダリティ研究は 1950 年に発表された В.В. Виноградов の論文“О категории модальности и модальных словах в русском языке”から始まった⁽¹⁶⁾。В.В. Виноградов もまた、モダリティこそが文の本質的な構造を司るものであることを強調している⁽¹⁷⁾。両者の研究は共にモダリティに関係しているのが話し手（говорящий）に端を発する主観的態度であるという事実を示している。

В.В. Виноградов 以降、ロシア語構文論の 1 カテゴリーとしての地位を得たモダリティは多くの研究者の関心の対象となった。その後、モダリティは「客観的モダリティ（объективная модальность）」と「主観的モダリティ（субъективная модальность）」の2つに大きく分類されることになる。「客観的モダリティ」とは構文的手段によって表現される。具体的には動詞の活用による法のカテゴリー（直説法、仮定法、命令法等）やモダリティをあらゆる動詞（мочь、должен 等）、及びその他の語⁽¹⁸⁾（действительно、возможно、надо、необходимо 等）が含まれる。また「主観的モダリティ」とは話者による実際の行為に対する真偽（достоверность）の判断を主にイントネーションや挿入句（может быть、вероятно、несомненно、конечно 等）を用いて表現する方法である⁽¹⁹⁾。

しかし、この分類方法では動詞の活用や他のモダリティをあらゆる語の補助を受けない不定形構文のモダリティを説明するには不十分であった。

この問題を解決するために、Г.А. Золотова はモダリティを3つに分類することを提唱した⁽²⁰⁾。すなわち、「話者の視点から見た行為に対する発話の関係」、「発話の内容に対

14 なおこの本の初版は 1932 年にパリで出版されている。ロシア語への翻訳は Ch. Bally の死後、1950 年に出版された第 3 版を基に Е.В. и Т.В. Вентцель によって行われた。ロシア語訳での表題は «Общая лингвистика и вопросы французского языка» である。邦訳はシャルル・バイイ（小林英夫訳）『一般言語学とフランス言語学』岩波書店、1970 年がある。

15 Балли Ш. Общая лингвистика и вопросы французского языка. М., 1955. С. 44.

16 Виноградов В.В. О категории модальности и модальных словах в русском языке // Труды института русского языка АН СССР. Вып II. М., 1950. С. 38–79.

17 Виноградов В.В. О категории модальности и модальных словах в русском языке // Виноградов В.В. Избранные труды. Исследования по русской грамматике. М., 1975. С. 55.

18 いわゆるロシア語伝統文法における“категория состояния”とよばれるものである。

19 Панфилов В.З. Категория модальности и ее роль в конституировании структуры предложения и суждения // Вопросы языкознания. 1977. № 4. С. 39–41.

20 Золотова Г.А. О модальности предложения в русском языке // Научные доклады высшей школы. Филологические науки. М., 1962. № 4. С. 65–79; Она же. Очерк функционального синтаксиса. С. 140–157.

する話者の関係」、「行為に対する行為主体の関係」である。ここでの前者2つはそれぞれ「客観的モダリティ」と「主観的モダリティ」に相当し、Г.А. Золотова はこれを“構文外モダリティ関係 (внешнесинтаксическое модальное отношение)”とし、これに対して後者を“構文内モダリティ関係 (внутрисинтаксическое модальное отношение)”とした。Г.А. Золотова がこのような分類を行った背景に不定形構文の存在があったことは想像に難くない。このようにして形式によるモダリティ表示に重点をおいた今までの研究は、Г.А. Золотова らの登場によって形式外(構文内)にあらわれるモダリティへとその研究テーマを移動していくこととなった。すなわち意味的構文論の始まりである。

1-1-2. 不定形構文におけるモダリティの意味分類に関して

不定形構文にあらわれるモダリティとして分類される意味には早くから必要性(необходимость)、義務(долженствование)、可能性(возможность)、希望(желательность)の存在が指摘されてきた⁽²¹⁾。そしてこの分類はГ.А. Золотова においても引き継がれ、構文内モダリティ関係によって不定形構文では上記の4つの意味が与えられていた⁽²²⁾。またГ.А. Золотова は後の自身の研究において不定形構文のあらわすモダリティに予定性(предопределенность)を追加している⁽²³⁾。不定形構文が予定性をあらわすこともまた、一部の学者によって早くから指摘されていた⁽²⁴⁾。よって本稿ではこれら5つの分類(義務、必要性、可能性、予定性、希望)を不定形のあらわすモダリティの意味の分類として用いることとする⁽²⁵⁾。

1-1-3. 古期ロシア語における不定形構文があらわすモダリティ生成の3つの階層とその決定要因としての話者と動作主体と格との関係

О.А. Черепанова 及び複数の学者⁽²⁶⁾は構文内でのモダリティ生成には2つの階層があると提案している。すなわち、第1の階層とは現実的・非現実的なものとしての構文内容と現

21 Буслаев. Историческая грамматика русского языка. С. 125; Пешиковский. Русский синтаксис в научном освещении. С. 347–348; Тимофеев. Об основных типах инфинитивных предложений в современном русском литературном языке. С. 265–266; Стеценко А.Н. Исторический синтаксис русского языка. Изд. 2-е. М., 1977. С. 88; Историческая грамматика русского языка. Синтаксис. Простое предложение / Под ред. В.И. Борковского. М., 1978. С. 278.

22 Золотова. О модальности предложения в русском языке. С. 77; Она же. Очерк функционального синтаксиса. С. 154.

23 Золотова Г.А., Онипенко Н.К., Сидорова М.Ю. Коммуникативная грамматика русского языка. М., 2004. С. 143.

24 Л.А. Булаховскийは古期ロシア語(例文は15世紀)において不定形構文が直説法未来の意味の代用をすることがあると述べている。Сѣ тазъ, равъ возжи Панъкратъ Ченей, пишоу сию грамоту дүше-вүю в конце живота; а вил миа ү своего села, а пошти ми с их рүк, = «а пойду(я умру) от их рук» (Духовная Панкрата Ченея, 1482 г.) (см. Булаховский Л.А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Изд. 5-е. Киев, 1958. С. 351.)

25 不定形構文における「希望」のモダリティは常に助詞 бы を伴うことによって弁別されるため、今回の研究では分析の対象としないこととする。

26 M. Dokulil, “K modální výstavbě věty,” in *Studie a práce lingvistické* I (Praha, 1954), pp. 255–

実との関連性であり、第2の階層とは話し手による構文内容の現実化レベルの設定である。O.A. Черепановаによれば、これらの2つの階層は客観的なものと主観的なものとして分類することが可能で、第1の階層とはより客観的モダリティを構成するものであり、これに対して第2の階層はより主観的なものとなる。また第1の階層をなすモダリティがあらゆる文に備わっているのに対して、第2の階層をなすモダリティは選択的である。更に第1の階層を成すモダリティが文法的（形態的・構文的）な表現方法と結びついているのに対して、第2の階層を成すモダリティは語彙的手段によって表現されている⁽²⁷⁾。

上記のモダリティ生成に関する理論を踏まえた上で、古期ロシア語にあらわれる不定形構文のあらゆるモダリティに関して筆者はそれが3つの階層より生成されると主張する。具体的には、モダリティ生成の第1の階層——あらゆる文に備わっており、かつ時間の概念による制限性と関連する現実性・非現実性による分類、モダリティ生成の第2の階層——不定形構文の動作主体を不定形構文の意味する行為へと駆り立てる話し手による意志（интенциональность говорящего）の影響、モダリティ生成の第3の階層——不定形構文が持つ特殊な語彙的意味による制限をあらわす⁽²⁸⁾。

そして筆者によって設定されたこれらの3つの階層すべてにおいて任意のモダリティが選出される過程では、「テキストの語り手と不定形構文の動作主体の関係」が重要な役割を担っていることが明らかになった。分析の結果を示すと以下ようになる。

1. モダリティ生成の第1の階層とは、時間の概念の共起と関連する現実性・非現実性による分類であり、このモダリティはあらゆる文に備わっていると考えられるが故に基層を成すものである。具体的には「テキストの語り手＝不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、両者の一致からそこには共有する時間的概念が存在することになり、現実的モダリティである「客観的予定性」をあらわす。一方、「テキストの語り手≠不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、そこに共有する時間的概念が発生しないことから「必要性」、「可能性」等といった非現実的モダリティを表示する。
2. モダリティ生成の第2の階層とは、不定形構文の動作主体を不定形の意味する行為へと駆り立てる話し手の意志によるモダリティ選択への影響である。すなわち、a) 非現実的モダリティの場合、不定形構文の動作主体が具体的な人物である時に、語り手による不定形が意味する行為に駆り立てる意志は具体的な動作主体に向かって強く示されている。その結果として「必要性」の非現実的モダリティを表示する。b) 不定形構文の動作主体が普遍人称であった場合、語り手による不定形が意味する行為に駆り立てる意志は具体的な対象を見つけることができず、その意志のレベルは具体的な人物の場合に比べて低下している。その結果としてあらわれる非現実的モダリティは「可能性」に限定される。c) 不定形構文の動作主体が無生物名詞であった場合、動作主体の行為に対する話し手の意志は自らの「主観的予定性」のモダリティをもってあらわされる。更に不

262; Шабалина В.Ф. К вопросу о средствах выражения модальности в русском языке: Автореф. дис... канд. филол. наук. Л., 1956等を参照。

27 Черепанова. Лексико-грамматические средства. С. 5.

28 Ватанабэ. Критерии актуализации модальных значений. С. 7-8.

定形構文の動作主体が人称代名詞である場合に關して、それが2・3人称であるならば、それはa)のタイプと同様に語り手による不定形が意味する行為に駆り立てる意志は具体的な動作主体に向かって強く示されるために「必要性」の非現実的モダリティをあらわす。これに対して動作主体が1人称代名詞である場合、話し手の意志は自らの行為に向かうことから話し手（語り手）自身による自らを動作主体とする不定形の意味する行為への意志は、他人のそれに比べてより直接的に、率直に、そして露骨にあらわれてくると考えるべきである。その結果として1人称代名詞が動作主体に立った際には現実的モダリティとしての「客観的予定性」をも含んだ強い「義務」があらわれている。このモダリティ生成の第2の階層も、不定形構文において話し手（語り手）と動作主体が（たとえそれが無生物であったとしても）常に存在することから、第1の階層と同様、必須の過程であると考えられる。

3. モダリティ生成の第3の階層とは、不定形構文が持つ特殊な語彙的意味による制限のことである。ここでは第2の階層で機能していた「不定形構文の動作主体を不定形の意味する行為へと駆り立てる話し手による意志」が、動作主体名詞もしくは不定形自身の持つ語彙的要素によって制限され、話し手による「主観的予定性」のみをあらわすような作用が働いていた。また「語彙的制限」に關しては、現時点までの調査の結果、なんらかの宗教的意味を含んだ語の場合に発生するようである。このような事例が発見できた理由として、古期ロシア語文献が現代作品以上にキリスト教的世界観の影響を受けていることに關連しているとも言える。なお、この第3の階層は必須の条件ではなく、そのモダリティ生成に際しての作用は選択的なものである。

筆者による上記の仮説は現時点で古期ロシア語テキストにあらわれるあらゆる不定形構文において適用することの可能なものである。しかし同時に「不定形構文は多かれ少なかれコンテキスト、ないしはコミュニケーションによる支え無しでは機能的に十分なものと成り得ない⁽²⁹⁾」という見解が一般的に受け入れられているのもまた事実である。今後は筆者が設定した仮説とコンテキスト、更には言語コミュニケーション間の関連性を証明することが必要である。

2-1. 意味的構文論におけるモダリティ研究

現代ロシア語構文論研究者たちは文を3つの観点から考察することを主張している。すなわち、1) 形式からの視点、2) 意味からの視点、3) コミュニケーションからの視点である。とりわけモダリティ研究においては後者の2つ、すなわち *modus* とコミュニケーションが重要視される。その理由はこれら2つの視点が話者によって設定され、それが文の形式と対立するからである⁽³⁰⁾。しかし同時に、現在に至るまで十分なモダリティ研究が行われてこ

29 *Тарланов З.К.* Становление типологии русского предложения в ее отношении к этнофилософии. Петрозаводск, 1999. С. 110.

30 *Шмелева Т.В.* Смысловая организация предложения и проблема модальности // Актуальные проблемы русского синтаксиса (Публикации лаборатории “Русский язык и русская литература в современном мире” филологического факультета МГУ. Вып. 1). М., 1984. С. 80–81.

なかったのには理由がある。何故ならモダリティは多くの場合、発話において見えない状態、すなわち仄めかしによって表現されるためである。また、もしモダリティが明るみになる場合、そこには文法的形態、特殊語彙といった要素が絡んでくることになるために結果的に形態の論議に拘り替わってしまうからである。特に不定形構文の場合、直接的にモダリティを表示する文法的形態が見られないことから、ロシア語伝統文法においては、イントネーションが重要な役割を担っていることが殊更に強調されていた⁽³¹⁾。しかし例えば古期ロシア語のテキスト上にあらわれる不定形構文ではモダリティの判定に際してイントネーションによる判別を強調することには無理があるといえる。

2-2. 意味的構文論におけるモダリティの捉え方

T.V. Шмелева は、modus⁽³²⁾ が複数の意味的カテゴリーの複合体として形成されていると主張している。T.V. Шмелева の理論によると、一般的な文におけるモダリティの生成は 1) 現実化カテゴリー (актуализационные категории)、2) 質的カテゴリー (квалификативные категории)、3) 社会的カテゴリー (социальные категории) の 3 つのカテゴリーの複合によって行われる⁽³³⁾。

筆者が主張する不定形構文のモダリティ生成に関する 3 つの階層の理論と、T.V. Шмелева の主張する上記の構文におけるモダリティ生成の 3 つのカテゴリーを詳細に比較・検討した結果、両者の主張にはかなりの部分で共通点が見られるという大変興味深いものとなった。よって以下では T.V. Шмелева の示す 3 つのカテゴリーとその下位区分の詳細を紹介し、それらが筆者の設定した仮説とどのような関連性を持っているのかを具体的に提示していくことにする。

3-1. 現実化カテゴリー

現実化⁽³⁴⁾ カテゴリーとは、会話の行われる時間とその参加者に対する文の客観的な内容の関係性を構築する部門である。このカテゴリーを形成するのは人称化 (персонализация)、時間の局在化 (временная локализация)、空間の局在化 (пространственная локализация)⁽³⁵⁾ である。

31 Грамматика русского языка. Т. II. Синтаксис. Ч. II / Под ред. В.В. Виноградова, Е.С. Истриной. М., 1960. С. 41.

32 T.V. Шмелева が用いる модус (modus) の概念は既出の Ch. Bally の同用語、ならびに理論に基づいている。なお、T.V. Шмелева 自身による модус の定義では、「модус とは発話における思考形成の一要因であり、また客観的情報 (диктум) の発信手段としての発話における主観的、著者的な内容」であるとされる。つまり T.V. Шмелева は広義での модус と狭義での модальность を使い分けている。В.В. Виноградов らが定義する модальность が T.V. Шмелева の定義する модус に相当すると考えてよい。(См. Шмелева Т.В. Текст как объект грамматического анализа. Красноярск, 2006. С. 50–51.)

33 Шмелева. Смысловая организация предложения. С. 82; Она же. Семантический синтаксис. Красноярск, 1994. С. 30–37.

34 T.V. Шмелева の用いた «актуализация» という用語は Ch. Bally の理論による。(См. Балли. Общая лингвистика и вопросы французского языка. С. 87–94.)

35 空間の局在化は発話の場所を здесь / не здесь という概念によって規定するものである。このよう

3-1-1. 人称化

人称化とは、コミュニケーションの中でそれぞれの役割を担う人物の述べられた出来事に対する関連性の表現を意味する。すなわち、a) 話し手、b) 対話者、c) 該当のコミュニケーションに参加していないすべての者の3分類であり、この場合、常に1人称“Я”がコミュニケーションの人称化における基準となる。この効果によって、従来の動詞のカテゴリーでは行為主(актант)として常に主格によってのみあらわされていた話し手が、様々な方法によって表現されることが可能になった。例えば У меня машина. という文において、人称代名詞は主格主語による表示を持たないにもかかわらず、コミュニケーションにおける直接の参加者を意味している。一方で У меня в университете новый ректор. という文では話し手はコミュニケーションに直接関係する人物でありながらも、重要度が低下し背景にまわっている。

一方、筆者が設定した不定形構文のモダリティ生成の3つの階層の第1の階層において、「テキストの語り手と不定形構文の動作主体の一致・不一致」という過程を主張した。これは直接引用⁽³⁶⁾タイプのテキストの場合に会話の話し手と、あるいはコメントタイプの場合にはテキストの語り手と不定形構文の動作主体がそれぞれ一致するかどうかを判定する過程であった⁽³⁷⁾。すなわち、筆者が提案した上記の過程は、T.V. Шмелеваの理論で言うところの人称化によるコミュニケーション内の登場人物の決定に相当すると考えられる。特に古期ロシア語テキストの場合、T.V. Шмелеваが主張するような一般的なコミュニケーションにおける話し手の存在だけではなく、テキストの語り手(автор)と直接引用タイプにおける会話の話し手(говорящий)という区別があることは、十分に注意を払うべき点であると考ええる。

3-1-2. 時間の局在化

時間の局在化とは、述べられた出来事に関する発話時点を基準とした時間軸の設定を意味する。ここでは発話時点での過去・現在・未来の決定を行う。

これは筆者の仮説と比較した場合、「現実的モダリティ」と「非現実的モダリティ」の分類に相当する。ただし不定形構文の場合、それが時制のパラダイムから切り離されているという特徴から、時間軸を形式として表現することは不可能である。しかし同時にコミュニケーション内の人称化によってピックアップされた登場人物らはそれぞれ個別の時間軸を有していることもまた忘れてはならない。なお、動詞の体の力を借りて発話時点における現在、および未来をあらわすことは可能でも、過去をあらわすことができないのもまた特筆すべき点である。

な概念は例えばラテン語等では必要な modus のカテゴリーではあるが、ロシア語では必須でない
と T.V. Шмелева は述べている。(См. Шмелева. Смысловая организация предложения. С. 84.)

36 本稿で使用しているテキストタイプに関する「コメント」、「事実叙述」、「直接引用」等の用語、及び概念は、佐藤昭裕「古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』研究:その言語とテキストの構造」『京都大学文学部研究紀要』第31号、1992年、231-312頁による。

37 渡邊「古期ロシア語文献にみる不定形構文」11頁。

3-2. 質的カテゴリー

質的カテゴリーにおいて、話し手は該当の出来事やコミュニケーションに対して自らの関係を表現することが許可される。すなわちこのカテゴリーが狭義でのモダリティ (модальность) に該当する⁽³⁸⁾。このカテゴリーを形成するのは、授権化 (авторизация)、動機 (персуазивность)、評価 (оценочность) である。

3-2-1. 授権化⁽³⁹⁾

授権化とは、文中で述べられている情報の出所を確定する過程である。つまり、この過程において語り手 (автор) は任意の情報を発信するにあたって、それが自分に関するものか、他人に関するものかを分類することになる。言い換えるならば、著者によるコメントと引用の区別を行う過程を指す。一般的にこの過程は知覚の動詞を用いることによって行われることが多い。

(1) *Я думаю, что он скоро вернется.*

(2) *По сообщениям моего знакомого, он скоро вернется.*

具体例を挙げると、例文 (1) は授権化を受けて自らの情報として話し手から発信されている。これに対して例文 (2) では情報の発信者は話し手の友人となり、話し手の存在はコミュニケーションの前面にあらわれていない。

(3) *Мой знакомый сказал: “Он скоро вернется”.*

では例文 (3) のような直接話法の場合どうなるのであろうか。この場合、1 人称の話し手がコミュニケーション内に存在しないことから授権化は行われていない。すなわち話し手による *modus* が介入する余地がないということになる。

この授権化を筆者の過程に当て嵌めた場合、テキストタイプの分類に相当する。コメントタイプのテキストが自らの情報としての授権化を、事実叙述タイプのテキストが他者の情報としての授権化をそれぞれあらわしているのに対して、直接引用タイプに関しては授権化が行われていないことがわかる。つまり直接引用タイプのテキストでは語り手がコミュニケーションに含まれていない、言い換えるならば、直接引用タイプのテキストとは語り手によるコンテクストから切り離された存在であるということになる。

38 Т.В. Шмелева は自身の 1984 年の論文では質的カテゴリーに以下の下位区分を与えている。すなわち 1) модальность、2) авторизация、3) персуазивность、4) оценочность の 4 つである。(См. Шмелева. Смысловая организация предложения. С. 85.) しかし一般的な構文において модальность が形式によってあらわされることを考慮して、94 年の著書では модальность は現実化カテゴリーに移されている。(См. Шмелева. Семантический синтаксис. С. 30–32.)

39 авторизация は Г.А. Золотова の用語である。(См. Золотова. Очерк функционального синтаксиса. С. 263–278.)

3-2-2. 動機・評価

これらは話し手が真偽や肯定・否定の観点から情報を分類する過程である。動詞や様々なモダリティをあらわす語句を用いて情報に話し手の判断を付加する作業である。

これを筆者の提唱する不定形構文のモダリティ生成の3つの階層に当て嵌めた場合、「不定形構文の動作主体を不定形が意味する行為へと駆り立てる話し手の意志」が相当すると考えられる。不定形構文においては一般的な構文のように動詞の活用やモダリティをあらわす語句による話し手の動機・評価を行うことが出来ない。話し手による動機・評価は形式によってあらわれることのない「話し手の意志」によって行われることになる。よってその結果発生する不定形構文があらわす多種多様なモダリティの意味もまた形式によってあらわれることがない。これが不定形構文の解釈を困難にしている最大の要因である。

3-3. 社会的カテゴリー

社会的カテゴリーとは話し手に聞き手に対する関係（尊敬、公的、私的、友好等）をあらわす手段を許可する過程である。具体的には ты と вы の使い分け、父称をつけた呼びかけ等が含まれる。

このカテゴリーは筆者の仮説に当て嵌めた場合、第3の階層である「不定形構文が持つ特殊な語彙的意味による制限」にあたりと考える。何故ならこのカテゴリーによる modus の生成が上述の質的カテゴリーにおける話し手の動機・評価を阻害、ないしは規制する要因として機能しているという点で、筆者の仮説における「テキストの語り手の意志の影響を受けない語句の存在」との間に共通点が見られるからである。またこのカテゴリーが前者2つのカテゴリーと比較した場合、必須の条件ではなく、あくまで選択的なものであるという点においても筆者の設定した第3の階層と類似している。

3-3-1. 古代ロシアにおける社会的カテゴリーとは

ただし、古期ロシア語の不定形構文を検討する際に、このカテゴリーに関しては若干の修正が必要である。何故なら現代語と古代語ではそれぞれのテキストの存在する社会的状況に大きな違いが存在するからである。まず古期ロシア語では現代語にあるような敬語的表現の使い分けは完成していない。筆者の先行研究⁴⁰⁾、及び5章のテキスト分析で確認するように、古期ロシア語の場合、不定形構文における話し手の modus を制限するのは宗教的内容を含んだ語句の存在である。よって筆者はこのカテゴリーに関して、古期ロシア語の場合、これを「宗教的カテゴリー（Религиозные категории）」と名付けることを提案する。

4. 意味的構文論の観点から見たモダリティ生成の3つの階層の存在

前章で比較・検討を行った結果、筆者が設定した不定形構文のモダリティ生成における3つの階層の存在は T.V. Шмелева の提唱する modus のカテゴリーとほぼ一致する結果とな

40 渡邊「古期ロシア語文献にみる不定形構文」14頁；*Ватанабэ Кику*。Факторы, ограничивающие модальные значения в инфинитивных предложениях древнерусского языка (XI–XIV вв.) // Современная филология: актуальные проблемы, теория и практика. Сборник материалов II международной научной конференции. Красноярск, 2007. С. 211–214.

った。ここでは T.V. Шмелева の理論、及びその用語を基に再度筆者の設定した 3 つの階層を検討してみる。

筆者が主張したモダリティ生成の第 1 の階層とは、現実化カテゴリーのことであり、人称化、時間の局在化がここで行われる。第 2 の階層とは質的カテゴリーと一致し、授権化、動機・評価が行われる。また第 3 の階層とは宗教的カテゴリーを意味し、ここで第 1、及び第 2 の階層によって生成されたモダリティに一定の制限が加わる。第 1 の階層、及び第 2 の階層によるプロセスが必須条件であるのに対して、第 3 の階層によるプロセスは選択的なものである。以下実際のテキストを用いて解説を行う。

5. テキスト分析

(4) Володимеру же брату своему Издславъ ре(че) брате ты еси въ оу҃грехъ вѣль оу зѣта своего оу корола. ты вѣдаешъ всю мѣсль и дѣмѣ ихъ. а товѣ брате и ны(нѣ) пострудити(са) шпѣтъ моего дѣла ч(ьс)ти и своета и тако Ѡради Издславъ брата своего Володимера въ оу҃гры ко королеви... (Ипат. лет.: 408. 09–15.)⁽⁴¹⁾

自らの兄弟であるヴラディミルに対してイジャスラフは言った。「兄弟よ。お前はウグリの自分の娘のつれあいである王のもとにいた。お前は彼らのあらゆる思いや企みを知っている。兄弟よ。お前は今一度私と、そして自分自身の名誉のために努めるべきである。」こうしてイジャスラフは兄弟であるヴラディミルをウグリの王の下へと派遣した。

まずモダリティ生成の第 1 の階層である現実化カテゴリーの中で人称化と時間の局在化が行われる。すなわち、テキストの語り手である 1 人称 «Я」、話し手イジャスラフ、不定形構文の動作主体ヴラディミルがコミュニケーション内の登場人物として認識される。その後時間の局在化が行われる。すなわち話し手と動作主体が一致しないことから話し手と動作主体の間に不定形があらわす行為に関する共通の時間軸が発生することがなく、結果として非現実的モダリティが選択されることになる。

更にモダリティ生成の第 2 の階層、質的カテゴリーにおいて授権化、動機・評価の過程が行われる。まず授権化によってテキストが分類される。この場合該当箇所はイジャスラフの直接話法となっており、書き手による授権化が行われていない。よって語り手 «Я」はコミュニケーションから除外される。つまり書き手による授権化が行われている先行するコンテキストの影響を受けることはなく、該当箇所の不定形構文が影響を受けるコンテキストは引用文中のコミュニケーションの担い手であるイジャスラフとヴラディミルの関係による⁽⁴²⁾。更に動機・評価の過程においてイジャスラフの「不定形の動作主体を行為へと駆り立てる意

41 例文は Полное собрание русских летописей. Т. 2. Ипатьевская летопись. Изд. 2-е. М., 2001. から採用した。省略綴りの使用に際して原写本でそれぞれ綴りの上部に補われている小型文字は、その本来あるべき位置に戻してある。また титло (略号符) が用いられている場合には、省略されている語を () に入れて補った。それぞれの例の末尾にある数字は引用したテキストのコラム数と引用文の行数をあらわしている。

42 ただし、イジャスラフやヴラディミルが出典側の引用されている箇所以前のコンテキストの影響を受けている可能性は授権化の理論からも当然ありうる。

志」は具体的な対象であるヴラディミルに対して強く投影されるため、結果としてここでは必要性のモダリティがあらわれる。なお、第3の階層である宗教的カテゴリーの影響はここでは見られない。

(5) **ОН ЖЕ РЕЧ(Е) ИМА ЛЖЮТЬ ВАМ В(О)ДИ. [ОНА ЖЕ РЕКОСТА] НАМА СТАТИ ПРЯД О(В)ТОСЛАВОВЬ. Я ТЫ НЕ МОЖЬШЬ СТВОРИТИ НИЧТОЖЕ.** (Пов. вр. лет.: 177. 21–24.)⁽⁴³⁾

彼(ヤン)は彼ら二人(異教の占師)に「神々はお前たちに嘘を言っているのだ。」と言った。これに対して彼ら二人は「私たち二人はスヴァトスラフの前に立ちます。あなたは何も出来ません。」と言った。

第1の階層より人称化のプロセスが行われる。ここでのコミュニケーションの担い手はテキストの語り手、会話の話者、ならびに動作主体としての2人の異教の占師である。すなわち会話の話し手と不定形構文の動作主体が一致することから共通の時間軸が発生する。よって現実的モダリティとして不定形構文が唯一表現することの可能な「客観的予定性」が選択される。

第2の階層から授権化が起り、直接話法を伴う引用タイプのテキストと判定され、この時点でテキストの語り手はコミュニケーションから除外される。よってテキストの語り手(Я)は他人である異教の占師の意志を動作主体に投影する権利を持たない。このタイプのテキストでは第1の階層において最終的なモダリティが決定する。ただし話し手と動作主体が一致する場合でもそれが1人称である場合には第2の階層の機能が特別な意味を持つ。

(6) **Я К ВИТОВТУ МИ ЦЕЛОВАНИЕ СЛОЖИТИ.** (Доконч. в. к. Вас. Дм. с Мих. Ал. 1395. № 15. 41.)⁽⁴⁴⁾
私はヴィートフトに対して誓いの口付けをするだろう。

ここでは例文(5)と同様に第1の階層において人称化、時間の局在化の結果として現実的モダリティとして「客観的予定性」が選択される。しかし、続く第2の階層における授権化の過程においてテキストの語り手がコミュニケーションに含まれることから語り手によるコンテキストの影響を受ける可能性がある。動機・評価のプロセスが進行し、テキストの語り手の意志が動作主体である自らに投射される。Т.В. Шмелеваはこの授権化、動機の過程における真偽の判定に関連して、「“他人による”情報は“自分による”情報に比べて常に確実性で劣る」と述べている⁽⁴⁵⁾。裏を返せば自らに関する情報にはより強い確信があらわれることになり、これが「義務」という必要性よりも強いモダリティを発生させる原因になると考えられる。この結果、例文(6)のようなタイプでは第1の階層による「客観的予定性」と同時に第2の階層による「義務」が感じられる場合がある。この問題に関しては第2部において再度考察する。

43 例文は Полное собрание русских летописей. Т. 1. Лаврентьевская летопись. М., 1997. から採用した。[] はラヴレンチー以外の写本からの補完を意味する。その他の表記方法は Ипатьевская летопись. に準ずる。

44 例文(6)の出典は О.А. Черепанова の論文による。(См. Черепанова О.А. Лексико-грамматические средства выражения модальности в русском языке XI–XVII веков: Диссертация ... канд. филол. наук. Л., 1964. С. 230.)

45 Шмелева. Смысловая организация предложения. С. 92.

(7) ... и с того нача велии изнемагати и тако Б(ог)ъ поа и. и рече(че) Петръ вола Б(ож)на. а вси(м) тамо быти. (Ипат. лет.: 464. 13–15.)

そしてそこから彼は甚だ力を失い始めた。その時神が彼を導いた。するとピョートルは言った。「神の意志よ。その地のすべての者がそうなるでしょう。」

第1の階層よりテキストの語り手、キエフの大貴族ピョートル・ポリソヴィッチ、すべての者がコミュニケーション内の登場人物としてリストアップされる。また話し手と動作主体が一致しないことから共通する時間軸は存在せず、非現実的モダリティが選択される⁽⁴⁶⁾。

第2の階層では授權化の結果として直接話法のコミュニケーションに参与しないテキストの語り手が除外される。話し手の動作主体に対する意志はこの場合、「すべての者」という普遍人称に対して投影しているが、тамо という場所の局在化が行われていることからある程度の具体性を保っていると考えられ、必要性のモダリティが発生したと考えられる。

ただしこの場合、ピョートルが「神の意志」を代弁しているという状況から第3の階層が機能し、ここであらわれるモダリティは話し手による主観的な予定性に修正されてしまっている。

(8) ни мертвеца послышити, ни безумнаго наказати. (Слово Даниила Заточника: 31)⁽⁴⁷⁾
死人を笑わせることはできないし、馬鹿にものを教えることもできない。

第1の階層からテキストの語り手、死人、馬鹿がコミュニケーションの担い手として登場する。またお互いが一致しないことから共通の時間軸は存在せず、非現実的モダリティが選択される。

第2の階層において授權化の結果、一人称の語り手を中心とした事実叙述タイプのテキストであると判定される(ただし語り手は背景に隠れている)。また語り手の動作主体に対する意志は抽象的な存在である死人、馬鹿に対して投影されるため、結果として具体的な投影先を見つけないことができず、その意志のレベルは低下してしまう。結果としてここには可能性のモダリティがあらわれる。なお第3の階層はここでは参与しない。

(9) Быти грому великому! Итти дождю стрѣлами съ Дону великаго! Тү ед копнень придмати, тү ед сабланъ потрчати о шеломы половецкыа, на рѣцѣ на Кагалѣ, ү Дону великаго! (Слово о полку Игореве. 45–46.)⁽⁴⁸⁾

46 「その場にいるすべての者」にピョートル自身を含んだ場合、話し手と動作主体を含む集団が一致するため時間軸が発生し、現実的モダリティ(客観的予定性)を生成すると考えられるが、結果として第3の階層によってそれらの選択の可能性はすべて否定されてしまう。

47 例文は *Зарубин Н.Н.* Слово Даниила Заточника по редакциям XII и XIII вв. и их переработкам. Памятники древне-русской литературы. Вып. 5. АН СССР. Л., 1932. から採用した。例の末尾にある数字は同本に記されている段落番号を表す。

48 例文は Слово о полку Игореве: древнерусский текст, переводы и переложения, поэтические вариации. М., 1986. から採用した。例の末尾にある数字は R. Jakobson, *La Geste du Prince Igor* (New York, 1948) で用いられている参照番号である。なお Слово о полку Игореве に関してはオリジナルが消失していることを理由に古期ロシア語文献としての正当性を疑う意見がロシア国外の学者を中心として存在する。本稿ではこの問題には触れず、あくまで古期ロシア語文献の一つとして扱う。

やがて大いなる雷鳴がとどろくであろう。大いなるドンから雨が矢のごとくそそぐであろう。大いなるドンのほりかやらの岸辺では、ポロヴェツのかぶとを打ち据えて、こかしこに槍は折れるであろう。また剣は砕けるであろう。

第1の階層では人称化によってテキストの語り手だけがコミュニケーションの担い手として登場する。不定形構文の動作主体はすべて無生物名詞である。また語り手と動作主体が一致しないことから共通の時間軸は発生しない。よって非現実的モダリティが選択される。

第2の階層では授権化の結果、一人称の語り手によるコメントタイプのテキストであると分類される。動機・評価の過程では語り手の動作主体を不定形のあらゆる行為へと駆り立てる意志は、それを投影するべき自発的に行動することの可能な不定形構文の動作主体の欠如から自らの希望へと性質を変えてしまう。よってここでは主観的観測に基づく予定性（主観的予定性）があらわれる。

既出の例文（5-6）で検討した現実的モダリティとしての「客観的予定性」と例文（9）ではあらわれるモダリティの質に違いがあると思われる。すなわち、動作主体が無生物名詞の際にあらわれている「予定性」のモダリティには、話し手のより「主観的」な「予定性」があらわれていると考えられる。これはある意味話し手による「要求」や「願望」を多分に含んだ「予定性」であるといえる。それを示すものとして無生物名詞を動作主体として持つ不定形構文においては、その「予定性」を裏付ける“客観的”な条件が示されていない。

6. まとめ

第1部では筆者が設定した不定形構文のモダリティ生成における3つの階層の存在を意味的構文論の理論を用いて証明することを試みた。1-0.「第1部のねらい」において提示した3つの課題1) 不定形構文におけるモダリティ生成が3つの階層を成すこと、2) そのすべての階層において話し手と不定形の動作主体の関係が関与していること、3) 筆者の設定した仮説がコンテキストとその中にあらわれる言語コミュニケーションの中で機能していることの証明を目的としたわけであったが、それぞれの課題について結果とコメントを行って第1部を締めくくりにしたい。

まず、「不定形構文におけるモダリティ生成が3つの階層を成すこと」に関しては、T.B. Шмелева が提示したモダリティのカテゴリーが同様に3つのグループから成り立っており、それぞれのグループが筆者の提案した仮説における3つの階層と綺麗な一致を見せていることがわかった。すなわち、筆者による古期ロシア語のテキスト分析の結果として帰納的方法から導き出された仮説が、T.B. Шмелева の構文におけるモダリティ生成に関する演繹的方法による理論によって裏付けされたと言える。両者の理論を比較した結果、必然的に不定形構文のモダリティ生成における特徴が浮き彫りとなったことは興味深い。例えば、T.B. Шмелева が言う現実化カテゴリー（筆者の主張するモダリティ生成の第1の階層）における「時間の局在化」というプロセス、また質的カテゴリー（第2の階層）における「動機・評価」のプロセスが不定形構文においては形式によらない形で進行することがこの構文の解釈を複雑にしていた最大の要因である。言い方を変えるなら不定形構文自身がモダリティ以外に時間の局在化による何らかの時間の意味を内在している可能性があると思われ。こ

れに関しては本稿の第2部において更なる検討を行う。

次に「筆者の設定した3つの階層すべてにおいて話し手と不定形の動作主体の関係が関与している」と言う仮説に関しても同様に T.B. Шмелева の理論によって裏付けられたと言える。T.B. Шмелева によれば、言語コミュニケーションは常に話し手、すなわち1人称を中心に、その聞き手、それ以外の人物という対立の中で成立する⁽⁴⁹⁾。筆者の仮説におけるテキストの語り手、会話の話し手、不定形構文の動作主体とはまさにこれらのコミュニケーションの担い手のことであり、話し手、ないしは語り手が動作主体と一致する状況というのは、コミュニケーションにおける最も重要な話し手と聞き手の対立関係が成立しない、いわばモノローグ的な特殊状況がそこで発生していることになる。この場合に一般的なコミュニケーションにおいてあらわれるモダリティである「必要性」や「可能性」とは異なる、「義務」、「予定性」といった例外的なモダリティがあらわれるのも頷ける結果であるといえる。更に授権化という概念は、筆者の理論においていまだ曖昧であったテキストの語り手と会話の話し手の区別を明確にする理由を与えてくれた。つまり、テキストの語り手と会話の話し手が一致しない状況とは、例文(3)で見たように直接話法を嵌め込んだタイプのテキスト(直接引用)であった。この場合、授権化が行われていないことからテキストの語り手はコミュニケーションの関係外におかれることになる。つまり直接引用タイプにあらわれる不定形構文の解釈においてはテキストの語り手による前後のコンテキストからは切り離されるべきであるということになる。ここまで述べてきたことは、最後の課題である「筆者の設定した仮説がコンテキストとその中にあらわれる言語コミュニケーションの中で機能していること」を十分に証明している結果であるといえるだろう。

結論として、筆者が提案した不定形構文のモダリティ生成に関する3つの階層は言語コミュニケーションの中に確かに存在した。その生成においてはコミュニケーションの担い手に代表されるコンテキストが任意のモダリティの選択に規則的な影響を与えるが、時として前後のコンテキストから切り離されたり、より広義なコンテキストである特殊な宗教的(社会的)状況によって意味を制限されたりする可能性を含んでいる。

第2部 不定形構文と *быть* の諸形態を伴う不定形構文 (инфинитивные конструкции с формами глагола *быть*) との共通点⁽⁵⁰⁾

1-0. 第2部のねらい

быть の諸形態を伴う不定形構文(以降「*быть*+inf 構文」と表記)に関して、現時点までにおける文法的な問題点は主に次の2点であるといえる。すなわち、

49 T.B. Шмелева はこれを «я» – «ты» – «они» の対立と表現している。(См. Шмелева. Смысловая организация предложения. С. 82.)

50 第2部は *ВАТАНАВЭ КИКУ*: К вопросу общности модальных и временных значений между инфинитивными предложениями и инфинитивными конструкциями с формами глагола *быть* в древнерусском языке // Языковая система и речевая деятельность: лингвокультурологический и прагматический аспекты. Вып. I. Материалы международной научной конференции, посвященной памяти профессоров А.Н. Савченко, М.К. Милых, Т.Г. Хазагерова. Ростов-на-Дону, 2007. С. 16–17. を基にそれに大幅に加筆を行ったものである。

- 1) **быть+inf** 構文とは、分類上不定形構文に含まれるものなのか、それとも無人称構文に含まれるものなのか。
- 2) **быть+inf** 構文における **быть** の諸形態のあらわす意味とは存在 (**бытийность**) なのか、それとも時間なのか。

第2部では上記の問題に関して、先行研究を参考にしつつ、同時に第1部で提示した「モダリティ生成の3つの階層」の理論を適用する形で何らかの答えを出して見たいと思う。

1-1. 先行研究

быть+inf 構文は学者たちによって様々に分類されている。そして現在までに大きく分けて3つの解釈が存在する。

第1の解釈は、**быть+inf** 構文における **быть** の諸形態は不定形構文に時間の意味を与える存在ではなく、その存在が不定形構文をすぐに無人称のカテゴリーに置き換えてしまう存在であると考えられる。З.К. Тарланов は *нам было ехать*、*нам будет ехать* タイプの構文において動詞不定形は文法的に **быть** の諸形態に従属する形になっており、独立した働きを保っていないとして、次のように述べている。「*было*、*будет* といった形はここでは *следовало*、*нужно было*、*придется* といった意味の働きをしている。これらは不定形が従属的位置にある無人称表現の主要部をなすものである。よってこれらのタイプの構文を不定形構文と関連付けることはない。」⁽⁵¹⁾

なお、本稿では動詞 **быть** と不定形構文との関連性を古期ロシア語文献を分析対象として行うことに主眼を置いている。現代ロシア語においては **быть+inf** 構文の使用が古期ロシア語に比べて極端に少なく、それ故に注目されてこなかったという事実もある⁽⁵²⁾。

更に З.К. Тарланов と同様の立場を取る学者に К.А. Тимофеев がいる。彼はこの構文を「動詞不定形構文 (Глагольно-инфинитивные конструкции)」、後の研究ではより明確に「不定形無人称動詞構文 (Инфинитивные безлично-глагольные предложения)」と名付け、動詞不定形と無人称動詞との組み合わせの一種としてこの構文を扱っている⁽⁵³⁾。

これに対して、第2の解釈として、О.А. Черепанова は同構文に関して、「不定形の本質において無縁である時間の意味を動詞 **быть** の諸形態を用いて補完することをねらった組み

51 Тарланов З.К. Инфинитивные предложения в русском языке XVIII столетия (на материале языка басен и комедий): Автореф. дис. ... канд. филол. наук. Л., 1964. С. 13; Он же. Об основных проблемах изучения инфинитивных предложений. С. 136.

52 А.М. Пешковский は著書において「不定形構文」というカテゴリーを設けている。その中で彼は、不定形構文が仮定法を伴うことは現代ロシア語でも一般的であるのに対して、不定形構文が過去時制や未来時制を伴うことが「極めて稀」と述べている。その上で彼は、もし不定形構文が過去時制や未来時制を伴う場合、無人称構文と類似する形態であることを認めている。そして不定形構文が *было* や *будет* を伴う場合、「実質的には無人称構文と分類することが好ましい」と述べている。(См. Пешковский. Русский синтаксис в научном освещении. С. 349.)

53 Тимофеев. Об основных типах инфинитивных предложений в современном русском литературном языке. С. 289–291; Он же. Об основных типах инфинитивных предложений в древнерусском языке // Ученые записки ЛГУ. № 277. Серия филологических наук. Вып. 55. 1959. С. 4–13.

合わせ」であると主張している⁽⁵⁴⁾。すなわち、O.A. Черепанова は不定形構文と *быть+inf* 構文との違いとは、時間的な概念を不定形構文に持たせるか否かにあるとし、*быть+inf* 構文は不定形動詞の体や否定の助詞が持つ意味から独立して、不定形構文があらわすモダリティと同じ働きをすることが可能であるとしている。同時に動詞 *быть* が過去時制をあらわす場合、*быть+inf* 構文のあらわすモダリティは仮定法的意味合いに近づくことも付け加えている⁽⁵⁵⁾。現代ロシア語では「80年アカデミー文法」が不定形構文のカテゴリーにおいて次のようなパラダイムを提示している。

現在形	Здесь не пройти. Нам вместе работать.
過去形	Здесь было не пройти. Нам было вместе работать.
未来形	Здесь будет не пройти. Нам будет вместе работать.
仮定法	Здесь было бы не пройти. Нам было бы вместе работать. Здесь бы (было бы) не пройти. Нам бы (было бы) вместе работать.

このパラダイムが示すことは、O.A. Черепанова の解釈と同様に不定形構文に時制の概念を与えた結果 *быть+inf* 構文というものが出現することになったのであり、その基本形は不定形構文であるという見解を指示しているとも考えられる⁽⁵⁶⁾。

最後に上記の第1の解釈と第2の解釈の折衷案として、И.В. Зуева は *быть+inf* 構文における動詞 *быть* はある時はお互い結びついたものとして、またある時は独立したものとして機能し、これらの構文には不定形構文から無人称構文へと移行する過程がうかがえると述べている⁽⁵⁷⁾。

2. 不定形構文との関連性

2-1. 仮説の適用

第1部で提起した「モダリティ生成の3つの階層」の理論に従って *быть+inf* 構文を再解釈した場合、結論としてこの構文は無人称構文よりも不定形構文に対して近似性があらわれているということが出来る。すなわち、O.A. Черепанова の提唱する不定形構文に時間の概念を付与したものが *быть+inf* 構文であるという理論が最も自然な *быть+inf* 構文の解釈を可

54 Черепанова О.А. Инфинитивные конструкции с формами глагола *быть* в русском языке // Научные доклады высшей школы. Филологические науки. М., 1972. № 4. С. 49.

55 Там же. С.49–50.

56 Русская грамматика. Т. II. Синтаксис. С. 373–378.

57 Зуева И.В. Инфинитивные предложения в русском языке и их структурно-семантические соотнесения в сербско-хорватском языке: Автореф. дис. ... канд. филол. наук. Воронеж, 1992. С. 14.

能にすることをテキスト分析を交えながら証明していくことにする。

2-2. 予想される問題

モダリティ生成の第1の階層にみられる「時間の局在化」が不定形構文とは異なり、この **быть+inf** 構文では一般的な構文と同様に形式によって表示される。しかし、話し手と動作主体の間の時間軸の共有・分離の概念はここでも存在するため、現実的モダリティと非現実的モダリティの分類はその機能を保っていると考えられる。具体的には不定形単独では表現することが不可能である過去時制に関しては、例外なく「モダリティ生成の3つの階層」の理論が適用可能であると思われる。一方で **быть+inf** 構文が現在時制 (**есть+inf**)、もしくは未来時制 (**будет+inf**) の形態をとる場合にある問題が生ずる可能性がある。何故なら、不定形構文は現実的モダリティにおいて「客観的予定性」を、また非現実的モダリティにおいて「主観的予定性」をそれぞれ表示する場合があります、それらが上記の構文と意味の重複を起こす可能性があるからである。

以下のテキスト分析ではこの点に注意を払いつつ、検討を行っていくことにする。

3. テキスト分析⁽⁵⁸⁾

3-1. **быть+inf** 構文が動詞 **быть** の過去時制を伴う場合

быть+inf 構文が過去時制をあらわす場合、不定形構文との間にあらわれるモダリティに関して意味の重複が起こる可能性がないため、「モダリティ生成の3つの階層」のシステムがそのまま適応可能である。

(10) **Еже было творити шпроку люему то сам кснь створилъ дѣла.** (Пов. вр. лет.: 251. 23–24.)

下級従士がすべきであったことを私は自分自身で行った。

例文(10)は第1の階層から人称化のプロセスが起こり、テキストの語り手、下級従士がコミュニケーションの担い手として登場する。次に時間の局在化の過程で発話時点での過去時制が選択され、同時に語り手と **быть+inf** 構文の動作主体が一致しないことから、共有する時間軸が発生せず結果として非現実的モダリティが選択される。第2の階層では授権化によってコメントタイプのテキストであると判断される。動機・評価のプロセスによって語り手の動作主体を **быть+inf** 構文の意味する行為へと駆り立てる意志は具体的な人物である下級従士に対して強く示されるために“過去の”「必要性」のモダリティが最終的に選択されることになる。なお、ここにあらわれるモダリティが非現実性を保っているということは、先に O.A. Черепанова が指摘していた、「動詞 **быть** が過去時制をあらわす場合、**быть+inf** 構文のあらわすモダリティは仮定法的意味合いに近づく」という観察を裏付けるものであると考えられる。

58 以後 **быть+inf** 構文が動詞 **быть** の過去時制を伴う場合、それを便宜的に「**было+inf** 構文」、また同様に動詞 **быть** の現在時制、未来を伴う場合、それぞれを「**есть+inf** 構文」、「**будет+inf** 構文」と表記することにする。

(11) а иных изъимаша вѣжаша в тверди. тѣхъ тамо извнша. и князем нашим не быс(ть) кого воевати. (Лавр. лет.: 451. 20–21.)

別の者たちは捕らえられ、また皆へと逃げ込んだ。しかし彼らもそこで捕らえられた。故に我らが公たちは誰とも戦う必要はなかった。

(12) аще похъати будаше ѿвѣрину, не дадаше въпрачи коня, ни вола, но велаше въпрачи /3/ ли /4/ ли /5/ ли женъ в телѣгѣ. и повести ѿвѣрѣна. (Пов. вр. лет.: 12. 02–06.)

もしも一人のアヴァール人が乗り物で出かけなければならなかったなら、彼は馬も牛も繋ぐことを許さず、三人なり四人なり五人なりの女を馬車に繋ぎ、自分を運ぶように命じたのである。

例文 (11–12) においてもテキストの語り手と было+inf 構文の動作主体はそれぞれ異なる人物を指し、かつ動作主体が具体的な人物であるため、そこにあらわれるモダリティは過去の必要性である。

(13) и послысася ре(че) отъ сего ли лва снъротъ было взати лигъ (Пов. вр. лет.: 39. 07–08.)

するとオレグは笑って言った。「この頭蓋骨のために私が死を受けたのだろうか。」

ここでは第1の階層から人称化によってテキストの語り手、オレグが登場する。時間の局在化から発話時点での過去時制が選択され、同時に話し手と動作主体の一致が時間軸の共有を誘発する。その結果として現実的モダリティとしての過去における「客観的予定性」が示される。第2の階層では授権化の過程が進行し、直接引用タイプのテキストと判定される結果テキストの語り手はコミュニケーションから除外される。よってテキストの話し手の意志は直接的な影響を動作主体に行使用することが出来ないため動機・評価の過程は行われない。

(14) се же /2/ е мщенье створи, кгоже не ваше лѣпо створити, да вы Б(ог)ъ Вместникъ былъ. и вздожити было на Б(ог)а мщеникъ свое. (Пов. вр. лет.: 268. 22–25.)

こうして彼は二度目の復讐をしたが、これをしたのはよいことではなかった。神が復讐者となられるようにし、自らの復讐を神に任せるべきだったからである。

第1の階層において人称化の過程が発生する。例文 (14) では было+inf 構文の動作主体が表示されていないが、前文よりこの構文の動作主体が具体的な人物（彼 = ヴァシリコ）であると読み取れる。これに加えてテキストの語り手がコミュニケーションの担い手として登場する。時間の局在化によって発話時点における過去時制が選択され、また発話者と動作主体が一致しないことから共有する時間軸は発生しない。この結果、非現実的モダリティが選択される。第2の階層ではまず授権化のプロセスが進行し、語り手によるコメントタイプのテキストであると判定される。更に動機・評価の過程で語り手の意志は具体的な人物である彼（ヴァシリコ）に対して明確に投射される結果、ここにあらわれるモダリティもまた、先の例と同様に過去の必要性である。

(15) и высть видѣти страшно чудо. (Пов. вр. лет.: 44. 29)

恐ろしい奇跡を目にすることになった。

(16) и поидоша полкове, аки борове, и не вѣ презрѣти ихъ: и Рѣсь поидоша противу имъ.
(Пов. вр. лет.: 278. 21–23)

そこで(ポロフツィの)軍勢は松林のように進軍し、それらを見渡すことが出来なかった。またルシもそれに対抗して進んだ。

例文(15–16)でも было+inf 構文の動作主体が表示されていないが、こちらは例文(14)とは異なりその動作主体は不特定多数の人を指していると考えられる。よって語り手による動作主体を было+inf 構文の表す行為へと駆り立てる意志は具体的な対象を見つけることができずにレベルの低下を起こしている。その結果としてこれらの例文にあらわれるモダリティは「可能性」に限定されている。

3-2. БЫТЬ+inf 構文が動詞 БЫТЬ の現在時制を伴う場合

基本的に есть+inf 構文と不定形構文は同一の構文であると考えられる。その証拠として О.А. Черепанова はロシア語史の中において不定形構文がその近似性から есть+inf 構文を駆逐したと述べている⁽⁵⁹⁾。ただし、不定形構文が現実的モダリティとしての「客観的予定性」をあらわす場合(例文5参照)と非現実的モダリティとしての「主観的予定性」をあらわす場合(例文9参照)に限って、これらの不定形構文が есть+inf 構文と意味の重複を起こしてしまう可能性がある。

К.А. Тимофеев の古期ロシア語における不定形構文研究の中に、この問題の解決の糸口となる観察が見られる。すなわち есть+inf 構文が持つ意味について К.А. Тимофеев は次の2種類のモダリティを挙げている⁽⁶⁰⁾。

- 1) 行為の知覚または実現の可能性。すなわち不定形によってあらわされる拡大解釈された現在時制、または普遍的条件下において考えられ得る状況。
- 2) 義務ないしは必要性。

К.А. Тимофеев は1)のモダリティをあらわす例として以下のものを提示している。

(17) видѣти есть монастырь славнѣ сущѣ на мѣстѣ томъ. (Жит. Феод. Печ.)

その地にあるすばらしい修道院を目にすることが出来る。

(18) си же вѣдѣти есть како же и донынѣ м(о)л(н)твами его вси оумножаются въ монастыри его. (Жит. Феод. Печ.)

今日に至るまで彼の修道院にあるすべてが彼の祈りによってその数を増しているように認められるのである。

(19) есть знати гдѣ же была баня та до днесь... (Хожд. игум. Даниила)

今日までその浴場があったところを知ることが出来る。

59 Черепанова. Инфинитивные конструкции с формами глагола быть. С. 53.

60 Тимофеев. Об основных типах инфинитивных предложений в древнерусском языке. С. 6–7.

例文（17-19）に「モダリティ生成の3つの階層」の理論を適用した場合、テキストの語り手が *есть+inf* 構文の動作主体に対して行使しようとする自らの意志はすべて不特定多数の人物に向けられている。いわばこれらの構文の動作主体はすべて普遍人称である。よって К.А. Тимофеев の観察通り、ここにあらわれるモダリティは可能性のみであるといえる。そしてここでの *есть* の働きも К.А. Тимофеев が指摘するように本来であれば普遍的な状況であるところ広い意味での現在時制を付与すること（時間の局在化）で、語り手による経験であることを示し個別化を図ろうとしている。

更に2) のモダリティをあらわす例として次の2例を挙げている。

(20) *Рече: въ сии часъ скончаша Янастасии ц(а)рь и есть ли ити оубо по 1 дни. (Жит. Саввы Освященного)*

そして(彼は)言った。「その時皇帝アナスタシイがなくなったので、一兩日中に私は出向くことになる。」

(21) *Тако же и съде разоудѣквати есть. (Жит. Феод. Печ.)*

よってここで(我々は) 理解せねばならない。

筆者は上記の2例に可能性以外のモダリティを与えた К.А. Тимофеев の解釈を支持する。ただし、必ずしも義務のモダリティとは限らない。すなわち、例文(20)において第1の階層から人称化が進行し、テキストの語り手、会話の話し手、動作主体が選出される。更に時間の局在化から発話時点での現在が選択され、会話の話し手と *есть+inf* 構文の動作主体は一致することから共有する時間軸が発生し、現実的モダリティとしての客観的予定性が選択される。更に第2の階層から授權化によってテキストの判定が行われ、直接引用タイプであることが示される。その結果としてテキストの語り手がコミュニケーションから取り除かれる。よってこの例文(20)ではテキストの語り手による動作主体への意志の投射は行われなため、客観的予定性のみを表示する。一方、例文(21)に関して К.А. Тимофеев が示したこの例文の前後の内容を検討してみると、テキストの語り手は聖サヴァの身に起きた奇跡について語り、それ故我々はその地に修道院を神が建てたことを理解せねばならないと述べている箇所である⁶¹⁾。よってこの例文(21)の動作主体はテキストの語り手をも含んだ“我々”をあらわす1人称代名詞が省略されていると考えるべきである。よって例文(20)とは異なり、ここでは第1の階層で生成された客観的予定性のほかに、第2の階層の授權化の過程でテキストの語り手自身がコミュニケーションに含まれることから、語り手の意志は動作主体である自らを含んだ集団に対して強く投射されることになる。ここでは確かに К.А. Тимофеев が主張するように義務を含んだ客観的予定性のモダリティがあらわれているといえる。

ではこの場合、共に「義務」のモダリティを表示していると考えられるコメントタイプのテキストにおける動作主体に1人称代名詞を伴う不定形構文と、*есть+inf* 構文のあらわすモダリティの違いはどこにあるのであろうか。ここもやはり *быть+inf* 構文が時間の局在化を形式によって表示することと関連があると思われる。時間の局在化によって不定形構文に時

61 Библиотека литературы Древней Руси. Т. 1. XI–XII века / Под ред. Д.С. Лихачева, Л.А. Дмитриева, А.А. Алексеева, Н.В. Поньрко. СПб., 2004. С. 416–417.

間の意味が付与されていると考えた場合、以下に提示する 1 人称代名詞を動作主体とする不定形構文（例文 22–24）と比較することによって、コメントタイプのテキストにあらわれる *есть+inf* 構文では不定形構文が第 2 の階層を経た結果としてあらわすべき「義務」のモダリティ以外に、モダリティ生成の第 1 の階層における時間の局在化の過程で形成された発話時点での現在時制、及び人称化に基づくテキストの語り手と動作主体の一致に伴う時間軸の共有と結びついた現実的モダリティとしての「客観的予定性」を不定形構文以上に強調していると考えられる⁽⁶²⁾。

(22) *Я врата своего старшего накѣти ны и читити въ отцево мѣсто.* (Докончание. в. кн. Семена Ив. 1350–51. 11.)

また我々は自らの年長の兄を選ぶであろう、そして父の場所に敬意を表するだろう。

(23) *Быти ны за одинъ до живота.* (Доконч. в. кн. Семена Ив. 1350–51. 11.)

我々は生きている限りただ一人に従うだろう。

(24) *Я к Витовтѹ ми целованне сложити.* (Доконч. в. к. Вас. Дм. с Мих. Ал. 1395. № 15. 41.)⁽⁶³⁾

私はヴィートフトに対して誓いの口付けをするだろう。

しかし、実際には既に不定形構文と *есть+inf* 構文のあらかずモダリティの違いははっきりしたものではない。O.A. Черепанова が言うように、11 世紀から 17 世紀、すなわち古期から中期のロシア語において、時間の概念と動詞の体のシステムが構築されていくに従って、*быть+inf* 構文は大きな変化を蒙ったと考えられる。とりわけ *есть+inf* 構文は 14 世紀以降急速に衰退していくことになる。すなわち今日の不定形構文がその役割を担うようになったのである⁽⁶⁴⁾。ロシア語史、ロシア語歴史構文論の観点からの結論として、最初にあらわれたのは *быть+inf* 構文であり、動詞の体による時間表現が時代と共に発達していくにつれて、動詞の体によって現在および近未来の時制を表現することが可能となった。そして *есть+inf* 構文の時制マーカーである *есть* に脱落が生じた。その結果として誕生したのが今日の不定形構文であると考えられる。

62 O.A. Черепанова は *есть+inf* 構文の持つ基本的なモダリティは「必要性 (необходимость)」、ないしは「不可避性 (неизбежность)」であるとした上で次の例文を提示している。

от чего ми естъ удирети? (Пов. вр. лет.) 「何が原因で私は死ぬのだろうか。」

日本語訳で示したように、ここでは O.A. Черепанова が言うような非現実的モダリティではなく、直接引用（これはオレグが 2 人の異郷の占い師に尋ねた直接話法の部分である）に伴うテキストの語り手の排除が起こるため、第 1 の階層で発生した人称化による話し手と動作主体の一致による現実的モダリティとしての客観的予定性と、時間の局在化による発話時点での現在時制のみがあらわれていると考えるべきである。(См. Черепанова. Инфинитивные конструкции с формами глагола *быть*. С. 52.)

63 例文 (22–24) の出典は O.A. Черепанова の論文による。(См. Черепанова. Лексико-грамматические средства. С. 230.)

64 Черепанова. Инфинитивные конструкции с формами глагола *быть*. С. 52.

3-3. БЫТЬ+inf 構文が動詞 БЫТЬ の未来時制を伴う場合

будет+inf 構文もまた есть+inf 構文同様に不定形構文のあらわす「客観的・主観的予定性」などの意味の重複を起こす可能性がある。

今回調査を行った結果、будет+inf 構文の動作主体に立つ名詞の70%以上が1人称代名詞であった。同時にこの構文があらわれるジャンルには偏りがあり⁽⁶⁵⁾、実務文書に頻繁にあらわれることもわかった⁽⁶⁶⁾。なおこの実務文書に見られた будет+inf 構文は、全く同内容で будет が脱落した不定形構文をヴァリエントとして持つ例がその大半を占めていることが明らかになった⁽⁶⁷⁾。

(25) аже ли **БУДЕТЬ** нынѣ **поѣхати**. то толико ли **БУДЕТЬ** на дорозѣ **остати**. (Ипат. лет.)⁽⁶⁸⁾
もし今私が出発するのであれば、多くのものを路上に私はおいていくことになるだろう。

(26) а где ли **БУДЕТЬ** **всести** на конь, **всести вы** со мною: а где ли **БУДЕТЬ** самому **не всести**, а **БУДЕТЬ** ли **васѣ послати**, **всести вы** на конь **везѣ** **ослушаныя**.⁽⁶⁹⁾
私が馬に乗って行くであろう場所へは、あなたは私と共に乗っていかねばならない。私自身が馬に乗っていかない場所へは、私はあなたを派遣せねばならない。あなたは逆らう権利はなく馬に乗って行かねばならない。

(27) а коли ли **БУДЕТЬ** **слати** свои данщики въ городѣ и на перебары...: а **тобѣ** свои данщики **слати** съ моими данщики вместе.
私が税の徴収者を町やビール・蜂蜜の製造所に派遣する際に、あなたも私の徴収者と共に自らの徴収者を派遣せねばならない。

まず、例文(25)はこれが直接語法を伴う直接引用タイプのテキストであることを考慮する必要がある。そこには授權化の結果としてテキストの語り手による意志の介入が許されない。これらのことから会話の話し手と動作主体の共有による時間軸の一致、ならびに時間の局在化による発話時点における未来の表示によって“未来の”客観的予定性のみが示されている。また、なぜ будет+inf 構文の殆どが実務文書(主に法律関係)において頻繁にあらわれ、その動作主体として1人称代名詞を持つのかという問題を考えてみた場合、例文(26-27)からも明らかなように、動作主体が1人称代名詞の時にのみ будет+inf 構文があらわれ、2人称の場合(例文の2重下線部)には不定形構文があらわれているという事実は興味深いものである。すなわち、ここではテキストの持つ性格が影響を与えていると考えられる。例

65 К.А. Тимофеев が будет+inf 構文として挙げている例は僅かに1つ(例文25)にすぎない。(См. Тимофеев. Об основных типах инфинитивных предложений в древнерусском языке. С. 7.)

66 Черепанова. Инфинитивные конструкции с формами глагола быть. С. 52.

67 Борковский В.И. Синтаксис древнерусских грамот. Простое предложение. Львов, 1949. С. 66-67.

68 例文は К.А. Тимофеев の論文から引用した。(См. Тимофеев. Об основных типах инфинитивных предложений в древнерусском языке. С. 7.)

69 例文(26-27)は В.И. Борковский の著書から引用した。(См. Борковский. Синтаксис древнерусских грамот. С. 66-67.)

文(26-27)が実務文書からの例文であることを考えた場合、果たして実務文書の話し手とは一体誰なのか、という問題が起こる。この場合の話し手とは俗世間における一種の絶対的権力をあらし、その意志はあらゆる動作主体に対して強制的に必要性のモダリティを与えるべき存在であると考えられる⁽⁷⁰⁾。そしてこの語り手によって強制的に与えられる必要性のモダリティが、絶対的権力者である自らに向けられてしまった場合(つまり動作主体に1人称が立った場合)、そこには文字通りの「矛盾」が起こってしまう。そしてこれを回避するためには自らへの必要性のモダリティを打ち消す手段が必要となる。それこそが第1の階層における時間軸の共有によって既にあらわれているはずの客観的予定性を強調するための時間の局在化を目に見える形で示す *будет* なのである。

будет の脱落したヴァリエントが多数存在するというのも、*будет* によって強調されている未来の時制を不定形構文は既に客観的予定性として弱められながらも保っているからである⁽⁷¹⁾。

3-4. *быть+inf* 構文と作品ジャンル等の関係

O.A. Черепанова は *быть+inf* 構文と同構文があらわれる作品ジャンルの関連性について、聖者伝、教訓、旅行記といった作品で *есть+inf* 構文が、また実務文書において *будет+inf* 構文が頻繁に用いられているとしている⁽⁷²⁾。この O.A. Черепанова の分析は、本稿の説に従うのであれば上記のジャンルにおいて時間の局在化を形式によって表示する必要が不定形構文に生じているということになり、それはすなわちテキストの語り手と動作主体が一致している状況、もしくは動作主体に普遍人称があらわれている状況の2パターン、言い換えるならばコメントタイプ、もしくは事実叙述タイプのテキストが頻出しているということをあらわしている。

また O.A. Черепанова は *быть+inf* 構文と用いられる不定形の意味についてもその関連性を指摘している。O.A. Черепанова はロシア語史の中で *быть+inf* 構文が用いられる際のおよそ3割が知覚動詞を不定形として持つことを指摘している。具体的には *видѣти*, *слышати* (左の2つの動詞で全体の8割を占める)、*знати*, *вѣдѣти*, *разумѣти*, *чѣти* といった動詞群のことである⁽⁷³⁾。

70 例えば *Русская правда* などでもこのような問題が起こる可能性がある。

71 現代ロシア語で *быть+inf* 構文に関する考察を行った Э.М. Тулапина はその結論において、*быть+inf* 構文の動詞 *быть* が不定形構文に時間の意味を与えていると述べている。更に、*было+inf* 構文と *будет+inf* 構文の出現頻度についても触れ、*было+inf* 構文に比べて *будет+inf* 構文の方が生産性が低いことを指摘している。その理由としては筆者が指摘したのと同様に *будет* が不定形に付随することによって未来の意味に重複が起こることが原因であるとしている。すなわち、構文自体が持つ意味的な未来と、文法的未来の2つが重なってしまうことになる。(См. Тулапина Э.М. Инфинитивные предложения с *было/будет* // *Русская речь*. М., 1969. № 1. С. 62-68.)

72 Черепанова. Инфинитивные конструкции с формами глагола *быть*. С. 52.

73 Там же. С. 54.

(28) Феѡфанъ же сѹстроѡте га въ ладѣхъ со огнемь, и пѹшати нача трѹбами огнь на лодѣхъ Рѹсина, и вы(сть) видѣти страшно чюдѡ. (Пов. вр. лет.: 44. 27–29)

テオファネスは火を備えた船に乗って彼らを向かえ、筒で火をルシの船に放ち始め、恐ろしい奇跡を目にすることになった。

(29) ... и в горѣ тон просѣчено шконце мало и тѹдѣ молвѣть, и есть не разумѣти языку ихъ... (Пов. вр. лет.: 235. 10–11)

その山には小さな窓が切り抜かれ、そこから人々がものを言うのですが、彼らのいうことを理解することは出来ない。

例文(28–29)はO.A. Черепановаが知覚動詞を伴うものとしてあげている例であるが、これらを見ると、その動作主体は普遍人称であるといえる。言い換えるならば、知覚動詞がбыть+inf構文の成立と直接関連しているというよりは、むしろこれらの知覚動詞がしばしば普遍人称を動作主体として用いられやすい意味を含んでいて、それが間接的にбыть+inf構文での出現頻度を上げていると考えられる⁽⁷⁴⁾。

4. まとめ

第2部ではбыть+inf構文と不定形構文がどのような関連性を保っているのか、という問題に対して第1部で提案した「モダリティ生成の3つの階層」とそれに深くかかわっている「テキストの語り手と動作主体との関連性」を手がかりとしての分析を行った。結論としてбыть+inf構文と不定形構文はそのモダリティの生成において全く同じ過程を踏んでおり、その意味で両者は同じ機能を有した構文であるということが出来る。

そして両者の歴史的な成立過程を見た場合、最初に成立したのがбыть+inf構文であり、その後、ロシア語の動詞の体の機能の整備が進むにつれて、不定形動詞そのものが自らのあらわしているモダリティ以外に現在、および未来の時制を表現することが出来るようになってくる。その結果まずесть+inf構文における現在時制マーカーであったестьの脱落を招くこととなり、今日の不定形構文の成立に繋がった。続いてбудет+inf構文もその生産性を失い、今日では会話文や方言にその多くの出現場所を求めようになってゆくのである。

第2部冒頭で提示した2つの問題、「быть+inf構文は不定形構文に分類されるべきものなのか、それとも無人称構文に分類されるものなのか」、「быть+inf構文の動詞бытьがあらわす意味は何か」に立ち帰る時、我々はこの構文をそのどちらでもない、新しいカテゴリーとして分類する必要があるだろう。すなわち、быть+inf構文こそが、本来「不定形構文」と呼ばれるべきものであり、今日“不定形構文”と一般的に呼ばれている構文は、このбыть+inf構文のヴァリエントにすぎない。そして、быть+inf構文の動詞бытьは明らかに不定形動詞が本来はあらわすことのできなかつた過去・現在・未来の時制をそこに付与する存在であった、と結論付けることになるだろう。

74 O.A. Черепановаは知覚動詞に補足という形で、運動動詞もしばしばбыть+inf構文に用いられる傾向があるとしている。しかしこれもやはり、運動動詞が意味的に普遍人称と結びつきやすいという傾向の結果であると考えられる。(См. Черепанова. Инфинитивные конструкции с формами глагола быть. С. 54.)

おわりに

本稿では、“不定形構文がいかなる条件でどのようなモダリティをあらわすのか”という問題を解決するために、「モダリティ生成の3つの階層」というものを設定し、そのすべての段階において「テキストの語り手と動作主体との関連性」が大きな役割を担っていることを証明した。証明に際しては意味的構文論によるモダリティ生成論と比較することで、この「モダリティ生成の3つの階層」もまたコンテキストと言語コミュニケーションの中で機能しているという事実を導き出した。

更に第2部では以前から不定形構文に類似したものとしてその存在は知られていたものの、構文としての定義に謎の多かったбыть +inf 構文に対しても第1部で提示したモダリティの生成条件の適用を試みた結果として、両者が表示するモダリティに関して同じ機能を持つことを証明した。すなわち、両者の違いは筆者の提案したモダリティ生成の第1の階層における「時間の局在化」を形式によって表示するか否かによることになる。

この不定形構文におけるモダリティ生成理論がコミュニケーション内で機能していることを証明できた以上、この理論は古期ロシア語に限定されるものではなく、中世・現代ロシア語においてもまた適用可能な普遍的なものであるはずである。今後はそれを証明する作業が必要であろう。

Исследование модальных значений в инфинитивных предложениях древнерусского языка

ВАТАНАБЭ КИКУ

Работа посвящена анализу модальности инфинитивных предложений (ИП) с точки зрения коммуникативных отношений. Исследование проводилось по двум направлениям.

Первое состояло в анализе категории модальности на основе теории семантического синтаксиса и позволило нам выделить три слоя: первый фиксирует значение реальной и/или ирреальной модальности, что дифференцируется по признаку временной определенности и/или временной неопределенности; второй – степень интенциональности говорящего, побуждающей субъект ИП стать производителем действия; третий – фиксирует влияние слов, с особым лексическим значением, преимущественно религиозным, и выступающих в качестве субъекта в ИП. Эти слова, как правило, препятствуют реализации интенциональности говорящего.

Используя теорию семантического синтаксиса при анализе модальности ИП, попробуем разрешить вопрос о соотношении процесса образования модальности и контекста. По мнению Т.В. Шмелевой, модальность (модус) предложения представляется комплексом семантических категорий, которые в соответствии с их назначением в предложении делятся на три группы: 1) актуализационные категории; 2) квалификативные категории; 3) социальные категории. Актуализационные включают «персонализацию» и «временную локализацию». В нашей классификации они равняются первому слою. Квалификативные категории, по Т.В. Шмелевой, составляют «авторизация», «персуазивность» и «оценочность». Они соответствуют вышеназванному нами второму слою. Социальные категории означают тот же третий слой модальности в ИП. В древнерусском языке вполне уместно эти категории назвать «религиозными категориями». При помощи теории семантического синтаксиса удалось доказать, что в теории нашей классификации функционируют коммуникативные акты, тесно прилегающие к контексту.

Второе направление исследования касалось анализа временных и модальных значений инфинитивных конструкций с формами глагола *быть* (конструкции «*быть+И*») с привлечением уже полученных результатов первой части работы.

Наиболее оправданной и находящей опору в истории ИП представляется точка зрения, согласно которой конструкции «*быть+И*» тяготеют к сочетаниям инфинитива с безличным глаголом. В то же время известно, что конструкциям «*быть+И*» присущи так же, как ИП, разные модальные значения: долженствование, необходимость, возможность или невозможность действия. Но до сих пор эти значения рассматривались только в рамках классификации и на основе времени и модальности. Вопрос же об условиях, влияющих на ту или иную модальность, не поднимался.

Замеченные нами причины и обстоятельства, трансформирующие модальность ИП, позволили с учетом закономерностей вывести новую классификацию.

На основе семантического синтаксиса мы проанализировали и применили полученные выводы и к конструкциям «*быть+И*», а именно использовали ту же те-

орию образования модальности, состоящую из трех слоев. Как выясняется, эти конструкции, с точки зрения способа образования модальности в коммуникативных отношениях, обнаруживают значительную близость к ИП.

Уточним, что в конструкциях «*быть+И*» функцией интенциональности говорящего к субъекту выбрана соответствующая контексту модальность. Заданная функция способствует актуализации модальных значений в ИП. Спрягаемые формы глагола *быть* лишь добавляют временное значение, которое не свойственно ИП. Из этого следует, что конструкции «*быть+И*» образуют временную парадигму ИП. Однако нельзя не заметить, что ИП, выражающие модальное значение «объективной предопределенности», и конструкции «*быть+И*» с формами глагола *быть* настоящего и будущего времени становятся фактом плеоназма или тавтологичности. Согласно мнению О.А. Черепановой, можно даже говорить о тождестве значений конструкций «*быть+И*» настоящего и будущего времени и ИП, что, по-видимому, явилось основной причиной постепенного вытеснения конструкций «*быть+И*» из употребления.

Итак, представленные в данной статье примеры доказывают, что, в принципе, ИП включают в себя будущее время как потенциальное, способное реализоваться или не реализоваться и потому не нуждающееся в дополнительных маркерах. Если в конструкциях «*быть+И*» формы *есть* и *будет* выполняют функцию маркера для «объективной предопределенности», то инфинитив без формы *быть*, выражая модальное значение под влиянием интенциональности говорящего к субъекту, выступает наравне с ИП, проявляя таким образом самостоятельность. Относительно конструкций «*быть+И*» прошедшего времени, с уверенностью можно сказать, что при помощи спрягаемой формы глагола *быть* они буквально отражают какое-либо модальное значение нереализованного в прошлом действия, которое несвойственно ИП.